



財団法人
ツール・ド・北海道協会

どさんこの熱意が実り、 世界が認めるトップ・ クラスの競技会へ

●北海道の活性化を図る

昭和62年に日本初の本格的なステージ・レースとして第1回大会が開催された「ツール・ド・北海道」は、昨年で第11回大会を迎え、回を重ねるごとに大会のレベルも向上し、昨年からはUCI（国際自転車競技連合）の公認競技となったことも加わり、国際的にも高い評価を受けるようになりました。

北海道の恵まれた自然環境を生かして、スポーツのメッカとしての位置付けを図り、北海道の活性化を目的に誕生した「ツール・ド・北海道」。ロード・レースを通じて自転車を普及するとともに、道民が自転車に親しむことで余暇を楽しみ、また健康づくりの機会を得ることも目的とされています。

また、北海道をPRするという意味でも「ツール・ド・北海道」には大きな期待が寄せられていて、雄大な大地を銀輪がすべるように駆け抜けていく姿は競技を通じて北海道の魅力を十分に伝えるものです。札幌の雪まつりやよさこいソーランまつりなど、年間を通して道内各地で活気にあふれたイベントが数々開催されていますが、本大会もそれらのイベントと肩を並べる大きなイベントであることは間違いありません。毎回3,000人もの人たちが大会を支え、これも道民の熱意の現れといえるでしょう。北海道を愛してやまない“どさんこ”たちが、「ツール・ド・北海道」を育てているといっても過言ではないはずです。

さらに、ここ数年の間に選手の技術力もみるみる高まり参加選手は国内だけにとどまらず、海外からも多数参加するようになりました。本場ヨ

ーロッパ型の自転車ステージ・レースとしては国内唯一。外国人選手30人以上が1週間以上北海道に滞在する国際大会は、地域の国際化にも一役かっています。

●人材育成が目標

もっとも、今後の課題もあります。現在はその年ごとにエリアを決めてレースを行っていますが、将来的には全道を1周するメジャーなレースを目指し北海道全域を巻き込んだ展開が考えられています。道民だけが関心を寄せるのではなく、「国民の認識を高め、オリンピックのように国民全体が注目する大きな大会へとステップ・アップしていきたい」と願う声も聞こえてくるほど。そのためにも規制を一つ、一つクリアしていかなければなりません。例えば、現状では競技で使える道路は左側車線のみ。選手が懸命にレースを展開している横を車が走っていくという姿は、ヨーロッパではありえないことです。「どうぞ選手の皆さん、わたしたちの街の道を思う存分使ってください」というように、一般の人たちも別のカタチで大会に参加し





ようという心意気が伝わってくるのが本場ヨーロッパのレース。片側車線のみでのレースは、大会を盛り上げる上でもマイナス要因になっていることは事実です。

また、ヨーロッパと違い日本は自転車の文化が希薄で、そのためにも日本のロード・レースのポジションをレベル・アップし、選手をはじめ自転車にかかわる人材を育成していく必要があります。ドライバーをはじめ、たくさんの人たちが自転車に対する理解を深め「勝手に車を止めて、公道で自転車の競技をやる」といった何事だ! などという苦情がこないようにしたいものです。

●ドラマがあるからおもしろい

大会期間中は各マスコミとも、こぞって選手の活躍を報道しますがそのほとんどが結果に終始します。

「ロード・レースの面白さはゴールよりも、その途中経過。1チーム5人で走るわけですが、それぞれに役割があって風よけになって他の選手を引っばっていく選手もいれば、ずーっと力を温存し最後に驚異的な力を発揮する選手もいます。ロード・レースには人間のドラマが集約されていて、レース全体の流れが把握できればこれほど魅力的な競技はありません」と言葉を強めるのは財団法人ツール・ド・北海道協会の青木正夫専務理事。ロードレースと自転車の普及および理解を深めるために日夜努力されています。

スポーツ競技一般にいえることですが、ルールがわ

かれば見る側の面白さはどんどん増していきます。峠を越え、沿道を駆け抜け、時には潮風を浴びて前進するロード・レースは自然を休いっばいに感じながら、緻密な作戦のもとペダリングを進める頭脳ゲーム。こんな一面がわかるだけでもレースを見る目は違ってくるはずですよ。

今後、日本はますます高齢社会に向かっていきます。そうした社会状況の中で、自転車の果たす役割はさらに重要になっていくという声は道民の中からも聞こえてきます。実際に「年をとるとまず足が弱ってきますが、自転車に乗っているとまずその心配がありません。心拍機能が上がり、風邪もひきにくくなりました。いつも注意を払って乗るから、ボケることもないのでは(笑)」という70代の男性も。

「ツール・ド・北海道」は自転車の楽しさを伝える素晴らしいイベントであり、その波及効果は無限大です。昨年の大会は、主催者(財団法人ツール・ド・北海道協会、財団法人日本自転車競技連盟)のレベルが、UCIの公認のステージレースの6というクラスのなかで、全51レース中100点満点で94.25という最も高い評価を得ました(ちなみに'97年のUCI公認レースは48カ国、466レース)。ヨーロッパの大会を抜いてこの点数は、大変名誉のあることです。この北海道で開催される「ツール・ド・北海道」が世界でもトップ・クラスの競技大会であることを道民はもっと誇りに思い、その自信を胸に時には大会の力となり、これからの大会に熱いエールを送ろうではありませんか。

(平成10年2月27日取材)

